

# 青年康熙帝の学力と官僚

Young Emperor Kangxi's Learning and  
His Relationship with Officials

滝 野 邦 雄  
Takino, Kunio

## ABSTRACT

This essay examines the learning of the young Emperor Kangxi. My conclusion is that at first his learning in no way measured up to the wide learning of his literati officials. It was only after a long period of effort, when he was in his thirties, that his learning was more or less comparable to that of his literati officials. In addition, this essay also discusses how the young emperor, still lacking in learning, dealt with his officials and how he managed to conceal his inadequacies.

## はじめに

康熙帝は、とにかくよく読書した。

朕（康熙帝）幼年より書を読むに必ず一百二十遍を以て率と爲す。蓋し此の如くせざれば、則ち義理 淹貫する能わず（『康熙起居注』康熙二十六年六月初十日丙辰条・一六四五頁）。

そしてその読書法とは、

書を読むは精進を貴とび、必ず攻苦・勤勞し、日 久しくして始めて能く洞徹す。一時の驟に能く貫通する者に非ざるなり（『康熙起居注』康熙二十五年三月二十九日癸未条・一四五六頁）。

というように、努力して時間をかけ、理解するものであった。

また、読書にはげんでいると述べる康熙帝に対して、張英（崇禎十年〔1637〕

～康熙四十七年〔1708〕：康熙六年丁未科二甲四名の進士）はこれまでの歴史においても稀なことであると称賛する。

臣〔張〕英 奏して曰く「前代の帝王の讀書は、經筵・日講の間の時に舉行し、僅かに故事と成る。皇上（康熙帝）の聖學 勤敏にして、意を精研に極め、經筵・日講 既已に寒暑 間無し。深宮の中、手づから卷を釋<sup>す</sup>てず、誦讀討論し、毎に夜分に至る。之を『書』・史に求めるに、誠に罕に睹る所なり。臣（張英） 左右に侍從するを得て、曷ぞ忻幸に勝えんや」と（『南書房記注』康熙十七年二月初八日条・『歴史檔案』一九九五年第三期〔總五十九期〕・一九九五年刊）。

また、張英は体のために休んでほしいとも述べている。

盛夏 酷暑なるも、皇上（康熙帝）の聖學 彌いよ勤め、日午・夜分も孜孜として輟<sup>や</sup>めず。臣愚（張英） 以爲らく、宜しく暫く誦讀の勞を停め、古人の休夏の義を思うべしと（『南書房記注』康熙十七年六月初八日条・『歴史檔案』一九九五年第三期〔總五十九期〕・一九九五年刊）。

このように精励刻苦して勉学する皇帝というのが、これまで抱かれ続けてきた康熙帝像ではないだろうか。

だが、そうした努力の結果として得られた康熙帝の学力（拙稿においては、經書を中心とする伝統的な意味のものとして用いる）について、当時の漢人官僚や読書人たちはどのように見ていたのであろうか。汪景祺（康熙五十三年の挙人）の『讀書堂西征隨筆』に次のようにある。

先帝（康熙帝） 南巡するに、無錫の杜詔、字は紫綸 方に諸生爲り。道の左に於いて詩を獻ず。先帝（康熙帝） 頗る之を許可し、綾字に御書するを賜う。杜〔詔〕 捧歸し啓き視れば、則ち「雲 淡く、風 輕く、午に近きの天」①の四句なり。某 七言絶句を作り云う「皇帝の揮毫 錢に値せず。詩を獻ぜし杜詔 綾箋を賜う。千家〔詩〕の詩句、頭より『雲 淡く、風 輕く、午に近きの天』を寫すのみ」と（「詼諧之語」『讀書堂西征隨筆』四十九葉・民國十七年排印本）。

①これは程顥（明道）の詩で、『千家詩』の巻頭に収められている。

康熙帝が南巡した時、詩を献呈されたので、お返しに書を書いてあたえた。ところが、その文句が少年用教科書である『千家詩』の冒頭の句にすぎなかったというのである。

実際、杜詔（康熙五年〔1666〕十二月二日～乾隆元年〔1736〕七月十二日・字は紫綸、江蘇・無錫の人：康熙五十一年壬辰科二甲十九名の進士）は、康熙四十四年に南巡してきた康熙帝に「迎鑾詞」十二章を献じている。杜詔の詩文集である『雲川閣集』（詩二・一葉～二葉）をみると、「迎鑾詞」は収められているが、康熙帝が何を揮毫して下賜したかについては記録されていない。ただ、この逸話を伝えた汪景祺は、江南の読書人たちは口では皇帝の学問を褒めそやしていても、心のなかではやはり学問が無いと考えていたことを示そうとしたのであろうか。<sup>(1)</sup>

また、康熙帝の文集である『聖祖仁皇帝御製文集』は、時代順に収められ初集から四集までである。文淵閣『四庫全書』に収められた『聖祖仁皇帝御製文集』の「書前提要」では次のように述べている。

臣等 謹みて案ずるに聖祖仁皇帝（康熙帝）御製の詩文 康熙二十二年癸亥より以前を初集と爲し、三十六年丁丑以前を二集と爲し、五十年辛卯以前を三集と爲す。並びに大學士の臣張玉書等が編録し、山東巡撫の臣蔣陳錫等が校刊し、康熙五十三年七月に告成す。其の五十一年壬辰以後より六十一年壬寅に迄ぶまでを四集と爲し、則ち雍正十年十二月に刊成す。和碩莊親王允祿等編録し、侍講學士の臣方苞等校刊す……（文淵閣「書前提要」：阮元・浙江刻本『四庫全書總目提要』卷一百七十三・集部二十六・別集類二十六所収の「提要」とはかなりの異同がある）。

（1）汪景祺は次の雍正帝の時に年羹堯の弾劾に連座して処分される。雍正帝は、この『讀書堂西征隨筆』の封面に次のような感想を記している。

悖謬狂亂なること此の極みに至る。惜しむらくは此れ（『讀書堂西征隨筆』）を見ることの晩きを。此れ（『讀書堂西征隨筆』）を留め以て他日を待ち、此の種をして網を漏れるを得しめざるなり（『讀書堂西征隨筆』一葉・民國十七年排印本影印）。

張玉書らが三集までを編纂し康熙五十年に刊行し（『清代内府刻書目錄解題』〔紫禁城出版社・一九九五年刊・四一六頁〕によると康熙五十年刊とある）、四集は方苞などが校刊し雍正十年に刊行したという。つまり、康熙帝の晩年と次の雍正の時代に編纂された書物である。<sup>(2)</sup>

そのうえ、『聖祖仁皇帝御製文集』初集から四集を通して見ると、論旨の部分はさておき、いわゆる論文の部分は、初集から四集まで理論が一貫していることに気が付く。ふつう、どのような人間でも年代によって考え方に揺らぎや変化などがあってもよいと思うのだが、康熙帝の文集の場合、まったくそれがない。『聖祖仁皇帝御製文集』を見るかぎりでは、若い時から晩年にいたるまで首尾一貫した思想と学力との持ち主であったように理解できる。こうしたことからすると、『聖祖仁皇帝御製文集』が一貫性を持たせるように手直されたか、あるいは、かなりの部分が皇帝はこうあるべきだという考えに沿って代筆や訂正された可能性がある、と私は思う。

すると、康熙帝の学力はそれほどのものでなかったのだろうか。私は、そうは思わない。かなりの教養を持った人物であったと思う。ただし、康熙帝が、いくら優れた資質に恵まれていたにせよ、最初から博学な文人官僚と対等な学力を持っていたとは考えにくい。やはり、努力を積み重ねていったのではないか。だが、康熙帝は生まれながらの皇帝であった。年少の頃から、いわゆる文人官僚と対等以上の学力を持っているという阿諛追従をうけて育った。官僚たちも、そのような態度を取る。ところが、青年期においては実際の学力がそれに追いついてこない。

拙稿では青年期の康熙帝の学力について述べるとともに、学力が不十分な青

---

(2)『康熙起居注』には、次のようにあり、康熙二十二年頃には詩文集が刊刻されたようである。

大學士の李霽・王熙 奏して曰く「皇上（康熙帝） 御極すること二十二年、御製の詩文甚だ富めば、天下の臣民 頒發を仰ぎ望む。且つ從來の帝王 皆な自ら製する文集有り。此の事 原より創行に非ず。況んや聖學 宏深にして、實に前代に比す可きものあらずをや。尤に宜しく刊刻し、中外に頒賜すべし」と。上（康熙帝） 之に従う（『康熙起居注』康熙二十二年八月二十日己未条・一〇五一頁）。

年期の康熙帝に対して官僚たちがどのような態度をとり、また康熙帝がどのようなふるまったかを見てみたい。

### (1) 青年期における康熙帝の学力

康熙帝はどのようにして勉学したのであろうか。康熙帝は、次のように述べている。

朕（康熙帝） 八歳にして登極し、即ち黽勉として學問するを知る。彼の時、我（康熙帝）に句讀を教えし者に、張・林の二内侍有り。俱に係れ明の時に多く書を讀みし人なり。其の書を教うるに、惟だ經書を以て要と爲す。詩文に至りては、則ち後とする所に在り。十七・八〔歳〕に至るに及び、更に學ぶに篤し（『聖祖仁皇帝庭訓格言』<sup>(3)</sup>）。

康熙帝は、八歳で即位した時から学問の重要性に気が付いていて、張と林という宦官から学問の手ほどきを受けた。両人は、康熙帝に經書を中心として教えたようである。そして、十七・八歳になってさらに勉学にはげんだというのである。十七・八歳というと、康熙九年・十年にあたる。まさしく青年期の康熙帝に影響を与えた熊賜履が講義していた時期と重なる。

また、康熙二十三年には次のように述べている。

朕（康熙帝） 五齡より即ち讀書を知る。八齡にして踐祚し、輒ち『大] 學』・『[中] 庸』の訓詁を以て之を左右に詢い、大意を求め得て、而して後

(3) 雍正八年四月一日の日付のある雍正帝の序文によれば、『聖祖仁皇帝庭訓格言』は、次のようにして編纂される。

……朕（雍正帝）四十年來、[康熙帝の言葉を] 祇だ聆て默識し、夙夜 凜遵（厳格に従い守り）し、仰荷して繼承（うけつぐ）し、益ます繼述（繼承）を圖り、疇昔の天倫の樂を追思す。叮嚀（再三）の告戒の言を緬懷（追念）すれば、既に歴歴として以て心に在りて、尚お洋洋として其れ盈つのみ。[そこで] 謹みて誠親王允祉等と各條を記録し、萃會して編を成し、恭しんで名づけて『庭訓格言』と爲す……（『聖祖仁皇帝庭訓格言序』）。雍正帝が康熙帝から聞いて心に在る言葉を記録して編纂したとする。しかし、その内容のほとんどは、それ以前に成立した『康熙起居注』や『南書房記注』などに見える記事である。そこからすると『聖祖仁皇帝庭訓格言』は二次史料集であるといえる。ただし、いま引用した記事も、基づくところはあると思われるが、今のところ他の史料には見当たらない。そこで、あえてここから引用した。

に愉快なり。日々読む所の者は、必ず字字 誦を成し、從來（これまで）肯て自ら欺かざらしむ。四子の書 既已に通貫するに及び、乃ち『尚書』を読み、典謨訓誥の中に、古の帝王の孜孜として治を求むるの意を體會し、之を施行に見さんことを期す。『大易（易經）』の〔爻の〕數に觀象・玩占①し、聖人の陽を扶け陰を抑え②、微を防ぎ漸を杜ぎ、「世に垂れて教えを立つ」（孔安國『尚書序』）の精心を読むに及びて、朕 皆な反覆探索し、必ず心 與し理會し、纖毫も扞格せしめずとす。實に義理（道理）の心を悦ばしざるを覺ゆ。故に此れを楽しみて疲れず③。但だ資性 不敏なれば、獨り『易』の旨に於いては、研究を極むと雖も、終に未だ洞徹せざるのみ。『[史] 記』・『[漢] 書』以て諸子百家・内典・道書に及ぶが若きに至りては、涉獵せざるはなく、事に觸れば猶お能く記憶す（『康熙起居注』康熙二十三年十一月初四日乙丑条・一二四九頁～一二五〇頁）。

①『易』繫辭傳に「是の故に君子は居れば其の象を觀て其の辭を玩び、動けば其の變を觀て其の占いを玩ぶ」。

②『漢書』李尋傳に「宜しく務めて陽を崇とび陰を抑えて、以て其の咎を救うべし」。

③『後漢書』光武帝紀上に「[光武帝があまりに熱心に政務を執るのを諫めたところ] 帝 曰く『我れ自ら此れを楽しむ、疲を爲さず』と」。

このように「八齡にして踐祚し、輒ち『[大] 学』・『[中] 庸』の訓誥を以て左右に詢い、大意を求め得て、而して後に愉快なり」と述べていることからすると、帝位に即いた八歳の頃には、『大学』・『中庸』を読んでいたようである。その後、治世の役に立つようにと考え、『書經』を学ぶ。続けて『易』も同じ理由から勉学するが、理解しにくかったという。そして、三十一歳の時までには万卷の書物を読んだと述べるのである。

では、康熙帝が八歳の頃に学んだ『大学』・『中庸』にはどのようなテキストが用いられたのであろうか。それは、康熙帝が、

『[論語] 先進篇「季氏問」章の御前講義が終わり] 上（康熙帝） [熊] 賜

履を召して御前に至らしめ、諭して曰く「朕（康熙帝） 爾等（熊賜履たち）の撰する所の講章を觀るに、張江陵（張居正）の『[四書] 直解』に較べて更に切實と爲す」と（『康熙起居注』康熙十二年九月初八日甲戌条・一一九頁）。

と言ったり、

朕（康熙帝） 張居正が『尚書』・『四書』の直解（『尚書直解』・『四書直解』）を閱するに、篇末 <sup>けみ</sup> 俱に支辭（いつわりの言葉）無し（『康熙起居注』康熙二十三年四月三十日乙丑条・一一七五頁）。

と述べたり、更に、

上（康熙帝） 曰く「『四書』 粗ぼ之を解するは、則ち張居正が『[四書] 直解』もて佳しと爲す。精意を求めんと欲すれば、『日講[四書] 解義<sup>(4)</sup>』に過ぐるは莫し……」と（『康熙起居注』康熙二十五年四月初四日戊子条・一四五九頁）。

としたりすること。また明の後宮にいた「張と林という二人の宦官から学問の手ほどきを受けた」ことなどからすると、最初は『四書直解』を用い、成人してもよく読んでいたのではないだろうか。

そもそも『四書直解』について言えば、『中国古籍善本書目』（經部・三三二頁～三三三頁：上海古籍出版社・1989年刊）には七種類もの版本が著録され、また禁書に指定されたわけでもないのに、『四庫全書總目提要』ではまったく無

(4) 阮元・浙江刻本『四庫全書總目提要』によれば、『日講四書解義』は康熙帝の御定とする。我が聖祖仁皇帝（康熙帝）の初年、訪落（始めて政務をとる）し、即ち經筵講義を以て親ら是の編を定む。推演する所の者は、皆な作聖の基・爲治の本、詞近くして旨遠し、語約にして道宏し、聖徳神功の爲す所 洙泗の傳に契し、唐虞の軌を繼ぐ者は、蓋し胥な此に肇まる（阮元・浙江刻本『四庫全書總目提要』卷三十六・經部三十六・四書類二・「日講四書解義」条）。

ところが、康熙帝自身は熊賜履が『日講四書解義』を作ったと述べている。

……前に熊賜履が作る所の『日講四書解義』刊刻するの時、朕（康熙帝） 以爲らく『日講四書解義』は 熊賜履の作る所なれば、應に其の名を列すべし、と。[しかし] 原任大學士の索額圖・杜立德・馮溥は、熊賜履の名教中の罪人なるを以て、應に名を列すべからずとす。……且そも熊賜履が作る所の『日講四書解義』は甚だ佳し……（『康熙起居注』康熙二十八年九月十八日辛亥条・一九〇一頁～一九〇二頁）。

視され、存目においてすら取り上げられない書物である。民国期になって『續修四庫全書総目提要』が編纂され、ようやく解題が書かれている。ただ、その評価も、「平實（へいばん）なり」とされる。

明の張居正撰。[張] 居正 講官爲りし時、『四書直解』を著わして進呈す。

其の書 先ず四書章句を標舉して綱と爲し、朱註を次にし、直解を次にす。

句ごとに櫛<sup>なら</sup>べ字ごとに比<sup>なら</sup>べ、大都<sup>だいたい</sup> 平實なり……（『續修四庫全書総目提要』

經部・四書類・倫明担当）。

ただし『四書直解』の「直解」部分は、口語で書かれており、理解しやすい。初学者にとって分かりやすく、また宦官にとっても教えやすい書物であったのかもしれない。そのうえ、これはもともと張居正が明の萬曆帝の勉強用にと進呈した書物であった。

こうしたことからすると、『四書直解』はやはり少年用の参考書の意味しか持っていなかったということであろう。すると、康熙帝が、『四書直解』を大意を得るには「佳し」としたこと、また道学者として有名であった熊賜履（崇禎八年〔1635〕～康熙四十八年〔1709〕：順治十五年戊戌科三甲百七十八名の進士）の講章（講義録）と比較したことなどは、この時期の朝廷にいた進士たちにどのような印象をあたえたのかが理解できるのではないだろうか。

ただ、康熙帝がほんとうに好んだのは詩文であり書法であったようだ。続いて、こうした康熙帝の嗜好と、それにうまく当てはまり異例の待遇を得るようになった高士奇の姿とを見てみよう。

## (2) 康熙帝の好み

三藩の乱が峠を越えた康熙十六年三月、康熙帝は次のように命じる。

上（康熙帝） 喇沙里等に諭して曰く「治道は儒雅を崇とぶに在り。前に旨有りて、着して翰林官をして作る所の詩賦詞章及び真行（楷書）・草書を將って不時に進呈せしむ。後に呉逆の反叛に因り、軍事 倥偬として、遂に未だ進呈されず。今、四方 漸く定まり、正に宜しく文教を修擧すべきの時



なれば、翰林官 作る所の詩賦詞章及び真行（楷書）・草書を將って進呈するを願う者有れば、着して不時に陸續と翰林院に送りて進呈せしめよ」と（『康熙起居注』康熙十六年三月十四日庚寅条・二九七頁）。

しばらく途絶えていた詩賦詞章や真行（楷書）・草書の進呈を復活するようというのである。それを受けて、五日後には詩文が進呈される。

是の日、學士の喇沙里 翰林官の作る所の詩文を將って進呈す。奉<sup>う</sup>けたる旨の「着して懋勤殿に進めしめよ」もてすればなり。皇上（康熙帝）進む所の詩文を將って親しく自ら譯讀し、又た漢文を講論す。復た喇沙里に命じて漢字を書きて呈覽せしめ、御筆を以て蘇軾の楷書手卷一軸を臨し、之を賜う（『康熙起居注』康熙十六年四月十九日乙未条・二九八頁）。

このことからすると、もともと康熙帝は詩文や書を好んだのではないだろうか。

さらに、李光地（崇禎十五年〔1642〕～康熙五十七年〔1718〕：康熙九年庚戌科二甲二名の進士）によると、康熙十年代前半に康熙帝の學術顧問であつた熊賜履が康熙十五年に失脚すると（拙稿「李光地と熊賜履」(上)・(下)『經濟理論』252号・253号参照)、康熙帝の周辺の官僚が詩文ばかり薦めたために、康熙帝は南方の人物（蠻子）の學問をみくびつたと伝える。

皇上（康熙帝）向學〔心があり〕、時に經學の好き道理<sup>も</sup>を把<sup>つね</sup>って澆灌進去（注ぎこむ）す。〔だから〕如今、發出し來る〔康熙帝の言動〕は自らはれ不同（すばらしい）なり。〔しかし〕孝感（熊賜履）の後、便ち上（康熙帝）に接する張敦復（張英）・陳澤州（陳廷敬）・葉子吉（葉方藹）より高淡人（高士奇）・徐乾菴（徐乾學）に至るまで、崑意〔康熙帝の〕道理・治道・經書〔への嗜好〕を破除す。〔そして康熙帝に注ぎこんだのは〕總て是れ詩歌詞賦の相い干せざる<sup>の</sup>話なり。所以に如今の修書は部部<sup>すべ</sup>都て是れ甚<sup>な</sup>麼かの菁華（精華）・詩餘・『羣芳譜』の類にして、擾攘して了らず。〔そして〕皇上（康熙帝）をして「蠻子の學問は此の如きにして止まるに過ぎず」と謂わしむ。「誰が厲階<sup>や</sup>を生じて、今に至りて梗ましむるを爲すや」（『詩經』大雅・桑柔）と（『榕村語錄續集』卷十六・學・十五葉）。

(康熙帝は、向学心があり、常に經学のすぐれた道理をご自身に注ぎこまれていた。そのため、あらわれた〔康熙帝の言動は〕おのずとすばらしいものであった。しかし、熊賜履が失脚してから後、康熙帝に接した張英・陳廷敬・葉方藹から高士奇・徐乾學にいたるまで、わざと〔康熙帝の抱いておられる〕道理・治道・經書〔への嗜好を〕排除しようとした。〔そして康熙帝に注ぎこんだのは〕すべて詩歌詞賦といった〔道理・治道・經書とは〕関係ない話であった。したがって、今の宮廷での編纂書はすべて精華集や詞や『羣芳譜』の類であって、むちゃくちゃにしてしまった。〔そして〕康熙帝に「蠻子（南方人：この場合は漢民族）の学問はこのようなもので止まっている」と言われることになった。〔これは『詩經』にいう〕「誰がこの禍の始めをなして、今になるまで病ましめるのか」というようなものである）

李光地のいうとおりだとすると、熊賜履失脚後の宮廷では詩文がもてはやされたのであろう。ただし、これは康熙帝自身が詩文を好んだことに原因するのではないだろうか。

おそらく、こうしたことから高士奇（順治二年〔1645〕～康熙四十三年〔1704〕）があらわれる。<sup>(5)</sup>高士奇は、それまでの学術顧問であった熊賜履にないもの

---

(5) 高士奇は、いわゆる科甲出身ではない。また、どのようにして康熙帝の身邊に仕えるようになったかは、はっきりしない（拙稿「李光地と徐乾学」(6)・『經濟理論』第288号・1999年刊で少し触れておいた)。『内閣漢票簽中書舍人題名』には、次のようになっている。

高士奇、浙江錢塘の人。康熙十三年、詹事府録事より閣に到る。博學鴻詞に薦舉され、後に翰林院侍講に改められ、官は禮部右侍郎に至る。文格と諡さる（咸豐辛酉刊『内閣漢票簽中書舍人題名』十葉）。

また、『聖祖實録』によると、康熙帝は康熙十六年十一月十八日に次のようにある。

辛卯（十八日）、大學士等 旨に遵がい翰林内廷侍直を選択し、名を列ねて旨を請う。〔そこで康熙帝は〕「侍講學士の張英に命じて加えて正四品の俸を食せしめ、内廷に供奉さす。其の書寫の事は一人にて已に足れば、<sup>かれ</sup>止だ高士奇をして内に在りて供奉し、内閣中書の銜を加え、正六品の俸を食せしむ。伊等 居住する房室は、内務府に交して撥給せよ。又た大學士をして論を張英・高士奇に傳えて、『伊等を選びて内に在りて供奉さすは、謹慎勤勞する後に必ず優用するに當ればなり。〔しかし〕外事に干預するを得る勿れ』と。其れ朕の論を恪遵せよ」と（『聖祖實録』卷七十・康熙十六年十一月辛卯（十八日）条）。

高士奇は、康熙十六年頃には、康熙帝によってかなり認められていたようである。

を持っていた。それは詩文の才能である。高士奇はここから、康熙帝に取り入れたようだ。後の資料であるが、浙江餘姚の張義年（?～乾隆四十三年〔1778〕）は次のように述べている。其の〔高士奇の〕文集 今に至るまで應制する者の以て金科玉律と爲す（「高士奇傳」・光緒癸巳刊『嗽蔗全集』卷二・二十七葉）。

高士奇の文集は、皇帝の命があった時に作成する詩文の模範となっていたというのである。後の人たちが、高士奇の文章を「金科玉律」としたのは、高士奇の詩文が皇帝の気に入られるような文体であったと意識されたからであろう。

ただ、高士奇はそれほど学問があったようではない。杭世駿（康熙三十五年〔1696〕～乾隆三十七年〔1772〕）は、高士奇の『天禄識餘書』に跋文を書き、その学問を次のように評価する。

錢唐の高侍郎（高士奇） 儒臣を以て先皇（康熙帝）の禁幄に侍するを獲て、退きて書 二冊を著わす。題して『天禄識餘』と曰う。意は延閣・廣内・秘室の藏①の、窮巷の陋儒の窺い見るを得る所に非ざる者有りと謂う。今、其の書を観るに、則ち「笑牋言鯖」②なり、豈に以て天厨（天子のくりや）の一饗（一切れの肉）に當たるに足らんや。其の徵引・辨説する所を述づけるに、大半は皆な前人の舊を襲う。一二の偏解は、時に牴牾する有り。……侍郎（高士奇） 身を石渠金鑰（宮廷図書館）に置き、人間 未だ見ざるの本を窺うを獲るに、采擷する所此の若し。此れ以て其の造詣を徵す可し（「天禄識餘書跋」『道古道集』卷二十七・十一葉）。

①『漢書』藝文志「於是建藏書之策」条の顔師固注所引の『七略』に「外に則ち太常・太史・博士の藏有り、内に則ち延閣・廣内・秘室の府有り」。

②高士奇の『天禄識餘』（卷五・七葉・「笑牋言鯖」条）に「纂新録に云う、笑牋言鯖は、腹笥（学問のたくわえ）に添えるに足る」。

阮元・浙江刻本『四庫全書總目提要』（卷一百二十六・子部・雜家類存目三・「天禄識餘二卷」条）は、

はの書（『天禄識餘』）宋・明の人の説部を雜采して、綴緝し編を成す。〔それは〕輒轉とする裨販（小商い）〔のようなもので〕、了（あきらか）に新解無く、舛誤の處 尤も多し。

と述べた後で、いまの杭世駿の「天禄識餘書跋」を引用し、最後に、

其れ〔高〕士奇を排斥して、餘力を遺さず謂う可し。然らば此の書を取りて之を覆勘するに、竟に〔杭〕世駿 輕々しく<sup>そし</sup>詆ると謂う能わざるなり。

と締め括っている。

錢大昕（雍正六年〔1728〕～嘉慶九年〔1804〕）も『十駕齋養新録』（「天禄識餘」条）において高士奇の『天禄識餘』の誤りを指摘し、その末尾で次のように述べる。

兩君（邵長蘅と高士奇） 皆な文名有るも書を讀まず、故に筆を<sup>うご</sup>渉かし便ち誤る（『十駕齋養新録』卷十四・「天禄識餘」条）。

鄧之誠（光緒十三年〔1887〕～1960年）は、

〔高〕士奇 才華（文才）膽敏にして、詩文 各々體格を具う（『清詩紀事初編』卷七・「高士奇」条）。

として、才華（文才）や詩文は評価している。

このように高士奇は、文才はあったもののそれほどの学識を持っていなかったようだ。しかし、このことが、かえって康熙帝の信任を得たこととつながっているかもしれない。いったい、いわゆる科甲出身の官僚は、進士及第を目指して八股文作成の訓練ばかりしていたものの、伝統的学術についてはやはりかなりの教養を持っていた。才能に恵まれたといっても学習中である若い康熙帝から、あれこれ言われるのは、あまり気の進まないことではなかったか。また、康熙帝の議論に合わせるために、自己の学識を押さえなければならないこともあったのではないだろうか。ところが、高士奇の学力が若い康熙帝とあまり変わらなければ、そうした気分を味わうこともない。また、科甲出身でない高士奇は、康熙帝にへり下ることは平気であったようだ。

では、康熙帝と高士奇との対話を見てみよう。康熙十七年に康熙帝は、唐詩を

評価する発言を行なう。高士奇はそれを承けてその見解を称賛する。

〔康熙十七年二月十九日〕未時、上（康熙帝） 臣〔高〕士奇を召して懋勤殿に至らしむ。上（康熙帝） 曰く「朕 唐人の詩を觀るに、命意（詩文の趣旨） 高遠にして、用事（典故の用い方） 清新なり。吟詠すること再三なるも、意味 窮まらず。近代の人の詩は工なりと雖も、然れども『英華 外に露われ』<sup>あら</sup>①、終に唐人の深厚雄渾の氣に乏し」と。臣〔高〕士奇 <sup>こた</sup>對えて曰く「唐人の〔文〕集の中、氣格・神彩（詩文の氣韻と風格）多く兼備する者有り。近代の何景明（成化十九年〔1483〕～正徳十六年〔1521〕・字は仲默、號は大復）・李夢陽（成化八年〔1472〕～嘉靖八年〔1529〕・字は献吉、号は空同子）の諸人の如きは、俱に詩名有るも、其の全集を讀むに、終に窺測（探究）し易きを覺ゆ。皇上（康熙帝）の鑑別は精確にして、誠に篤論なり」と（「康熙十七年『南書房記注』・『歴史檔案』一九九五年第三期（総五十九期）所収・一九九五年刊）。

①『禮記』樂記に「和順 中に積みて、英華 外に發す」。

同様に康熙帝が詩文について述べた発言を承けて、高士奇は康熙帝の書いた勅・論が帝王の体を得ているとし、ついでに康熙帝の詩も誉める。

〔康熙十七年八月二十日〕酉時、上（康熙帝） 臣〔高〕士奇を召して懋勤殿に至らしむ。上（康熙帝） 曰く「朕 嘗て詳らかに古人の詩文を覽るに、造語 精微にして、才學 兼ね到る。之を閱するは易きに似たるも、之に效う<sup>なら</sup>は甚だ難し。故に「讀書萬卷にして、方めて能く筆を下す」①と云う。神有れば更に須く善く古人を筆底に運び、陳腐を化して、清新と爲すべし。斯れ「善を盡くせり」（『論語』八佾）と爲す」と。臣〔高〕士奇 <sup>こた</sup>對えて曰く「毎に皇上（康熙帝）の聖制する勅諭を見るに、詞語 古勁（枯れて力強い）にして、意象 弘深、極めて帝王の體<sup>きのう</sup>を得。昨、賜り讀むを蒙る「秋日晚景」詩の中の一聯に「衷情静裏 人の識る無し、外象閑中 物尋有り」（『聖祖仁皇帝御製文初集』卷三十二所収「秋日晚景有懷」）と云うは、「太和宇宙」・「魚躍鳶飛」（『詩經』大雅・旱麓）の二句の中の如く、存養

省察の義を涵し、又た之が蒞籍（含蓄）の自然に出で、眞に性情の正しきを得て、列聖の傳を總ぶ。臣が淺學の能く窺い測る所に非ざるなり（「康熙十七年『南書房記注』・『歴史檔案』一九九五年第三期（総五十九期）所収・一九九五年刊」）。

①杜甫「奉贈韋左丞丈二十二韻」に「讀書 萬卷を破る、筆を下せば 神有るが如し」。また、蘇軾「柳氏二外甥求筆跡詩」に「讀書萬卷にして始めて神に通ず」。

『南書房記注』によると、康熙十七年・十八年には、高士奇はもっぱら康熙帝が詩文を閲する時に側にひかえていたようである。そして、康熙帝の発言に対して素直に感心する。これは、康熙帝の自尊心をおおいにくすぐることになる。

また、康熙帝は、高士奇に対して率直に自分の意見や自慢などを述べている。安心してしゃべっているのである。これは、相手の学力に対してあまり遠慮していないことを示しているのではないだろうか。それはたとえば、遅くまで仕事するのを心配された時、康熙帝が次のように答えているのにもあらわれている。

〔康熙十七年四月四日〕酉時、上（康熙帝） 臣〔高〕士奇を召して懋勤殿に至らしむ。上（康熙帝） 方に『尚書』を閲す。臣〔高〕士奇 奏して曰く「皇上（康熙帝） 一日萬機（『書經』皋陶謨）なるに、聽理（政治）に勤む。復た朝より夜分に至るまで、手ずから卷を釋てず。此れ誠に聖學高深にして、訓を千古に垂る。但だ聖躬の過勞するを恐る」と。上（康熙帝） 曰く「朕 幼きより書を読み、毎夜必ず三鼓（午前0時前後）に至る。凡そ覽閲する所、務めて融會を期し、恒に夜氣の清明にして、心神瑩暢なるを覺ゆ。之を行なうこと既に久しければ、自ら亦た其の勞を覺えざるなり」と（「康熙十七年『南書房記注』・『歴史檔案』一九九五年第三期（総五十九期）所収・一九九五年刊」）。

また、康熙帝が唐詩六十七首を暗唱すると、高士奇は褒めたたえる。すると、康熙帝は次のように自慢する。

〔康熙十七年七月十八日〕未時、上（康熙帝） 臣〔高〕士奇を召して懋勤殿に至らしむ。上（康熙帝） 唐詩二首を閲す。因りて復た唐人の五言律詩六十七首を誦し、姓名・詩題 一字も遺さず。臣〔高〕士奇 奏して曰く「皇上 一日萬機（『書經』阜陶謨）なるに、廣搜にして博覽なり。偶たま一たび翻閲すれば、皆な能く成誦す。從來、實に未だ見ざる所なり」と。上（康熙帝） 曰く「朕 幼きより讀書し、凡そ一字の未だ明らかならざれば、必ず尋繹を加え、「自ら欺くこと無き」（『大學』傳第六章）を期す。特に讀書のみを然りと爲さず、天下國家を治むるも亦た是に外ならざるなり」と（〔康熙十七年『南書房記注』・『歴史檔案』一九九五年第三期（総五十九期）所収・一九九五年刊〕）。

康熙十八年には、康熙帝は従來の兵法書を批判し、高士奇は感心する。

是の日（康熙十八年十一月三日）、上（康熙帝） 内府の書籍を檢閲し、臣〔高〕士奇 侍す。武備の諸書を閲するに因りて、上（康熙帝） 曰く「〔康熙〕十二年の〔三藩の乱による〕用兵より以來、嘗て前人の『韜略（『六韜』・『三略』）』・『武備〔志〕』等の書を取りて之を閲するに、亦た皆な紙上の談兵にして、事に益なし。間ま符咒の法術を用いる者有るは、尤も不經（でたらめ）に屬す。我朝の用兵 自ずから調度（やり方）有り、且つ號令 嚴明にして、人々 勇敢の氣を具う。即ち公卿大夫、皆な戎馬に嫻（習熟）れる、故に向かう所多く能く功を成す。王者の師、之を行なうに正しきを以てす①。豈に詭譎の術に藉らんや」と。臣〔高〕士奇 奏して曰く「歷代以來、養兵の法、惟れ本朝もて「善を盡くせり」（『論語』八佾）と爲す。皇上（康熙帝）の廟算（作戰計画） 神武にして、畫を指して方有り、眞に古の所謂ゆる『樽俎の間に折衝する』（劉向『新序』雜事一：交渉で勝つ）なり」と（〔康熙十八年『南書房記注』・『歴史檔案』一九九六年第二期（総六十二期）所収・一九九六年刊〕）。

①『孟子』滕文公上に「王者 起こる有れば、必ず來りて法を取らん。是れ王者の師と爲るなり」。

このように、康熙帝は高士奇と対話するときには安心して自慢しているのである。それは、高士奇の学力がそれほどではなく、学力的に不十分だった康熙十年代後半の康熙帝にとって気を遣わずに話せたからではないだろうか。また、康熙帝が好んだ詩文の嗜好と高士奇の資質とが合ったこともあるのであろう。こうして、高士奇は康熙二十八年に失脚するまで、康熙帝の側にひかえて権力をにぎることになる（拙稿「李光地と徐乾学」（8）・『経済理論』第298号参照）。

康熙二十年代になると康熙帝は、自信と学力をつけてくる。それが文人官僚に対する質問に現われるようになる。続いて、康熙帝がいろいろと質問して文人官僚たち困らせるようになる姿を見てみよう。

### (3) 康熙帝と文人官僚

康熙十六年五月十二日、二十四歳の康熙帝は次のように述べる。

學士の喇沙里等に諭して曰く「朕（康熙帝） 今より以後、毎日『四書』の大字（本文）を誦し畢れば、講官 講章を將って此の一章より書き下して講じ起せ。講解の處に至れば、朕が意に随え。講ぜんと欲するの時、朕みず親から講を爲さん」と（『康熙起居注』康熙十六年五月十二日丁亥条・三〇六頁）。

講官にさせていた『四書』の講義を時には自分で行ないたいというのである。この頃から、康熙帝はいわゆる伝統的學術にたいして自信を持ち始めてきたのではないだろうか。

ただ、康熙十八年に康熙帝と「格物」について議論した崔蔚林の例を見ても分かるように、妥協せず、あくまで自説を主張する相手に対しては、まだ十分な対処はできなかった（拙稿「康熙帝の朱子学」（上）『経済理論』第268号・1995年参照）。

康熙二十年代の前半になると、ようやく康熙帝の学力も文人官僚たちの学力に近づいてくる。しかし、康熙二十四年、官僚たちに『性理大全』と『皇極經世書』とについて次々と質問をしていることからすると、まだまだ自己の学力を確認し



たいという気持ちがあったのであろう。それは、次のようなものであった。

先ず、康熙帝は満州人官僚の麻爾吉<sup>(6)</sup>・常書<sup>(6)</sup>に対して、質問する。

上（康熙帝） 麻爾吉を顧みて問うて曰く「爾 曾て『性理大全』<sup>けみ</sup>を閲するや否や。其の中の意義 亦た能く通曉するや」と。麻爾吉 奏して曰く「臣の才識 淺陋なれば、『性理大全』の書 曾て看閱すと雖も、「皇極經世[書]」等の篇に至れば、殊に茫然として其の解を得ず」と。上（康熙帝）

曰く「朕 正に此れを以て問を爲さんと欲す。『皇極經世[書]』は乃ち邵堯夫（邵雍） 數を以てするの合理の書なり。推す所の先天の卦畫・元會運世の數、之を言いて甚だ悉くす。淺學の能く窺測する所に非ず。其の全書卷帙 尚お多し。程・朱 其の數の學に流れるを恐れ、大要を摘取して之を著す<sup>①</sup>。此の篇、朕 嘗て細かに研究を加え、略ぼ其の義を識るも、精微の蘊に至れば尚お未だ其の全を窺（うかが）えざるなり」と。因りて上（康熙帝）の手づから批する『性理大全』を出して以て示し、一字一句評閲し精詳なり。麻爾吉・常書 奏して曰く「皇上（康熙帝）の天縱 聰明<sup>かな</sup>にして、理學の先天・象數に潛心すれば、黙して千載不傳の秘に契う。聖學 緝熙し、前古に超出す。臣等 涯涘を測る莫し。欣幸の至りに勝えず」と（『康熙起居注』康熙二十四年三月初八日戊辰条・一二九九頁～一三〇〇頁＊『聖祖實録』卷一百二十・康熙二十四年三月戊辰〔八日〕条と少し異同がある）。

①この発言が『性理大全』の卷七から卷十三にかけて収められた「皇極經世書」についてのものならば、康熙帝に誤解があるのではないだろうか。『性理大全』は、明・永樂十三年（1415）に成立した書物だからである。

三月二十二日には、漢人官僚たちに、次のような質問を行なっている。

(6)『聖祖實録』卷一百二十・康熙二十四年三月戊辰（八日）条では、「麻勒吉」と表記されている。麻勒吉は、満州正黄旗人で、順治九年に初めて満州進士科が設けられた時の、一甲一名翰林院修撰である（『八旗通志初集』卷之一百九十一・名臣列傳五十一・正黄旗滿洲名宦大臣・「麻勒吉」条）。

上（康熙帝） 王熙に問うて曰く「爾 曾て『性理 [大全]』を讀むか」と。  
[王] 熙 <sup>こた</sup>對えて曰く「臣 <sup>わか</sup>少き年に亦た曾て讀めり。但だ精心玩味する能わざるのみ」と。上（康熙帝） 曰く「此の書は讀まざる可からず」と。  
王鴻緒 奏して曰く「『性理 [大全]』は義旨 精深なれば、讀む者は其の大義を識るに過ぎず。故に文を作るに明切なる能わず」と。孫在豐 奏して曰く「皇上（康熙帝）は天縱（生れつき）聖姿にして、又た加うるに聖學精勤を以てすれば、自然と詞理洞達す。臣等 豈に能く萬一を仰ぎ望まんや」と。奏 畢り、諸臣 卷を捧じて出づ。[康熙帝は] 學士の孫在豐を留めて之に諭して曰く「爾 可（まこと）に『性理 [大全]』を熟讀するや否や」と。[孫] 在豐 奏して曰く「臣 涉獵すと雖も、曉暢する能わざるなり」と。上（康熙帝） 曰く「朕も亦た即ち解する能わざる者有り、然れども必ず『[四書・五經] 大全』及び他の書を取りて之を考究すれば、務めて解するを得て而して後已む」と。因りて上（康熙帝）の讀む所の書を以て之を示し、一句ごとに一讀し皆な御筆の手もて自ら丹黄（校正）す（『康熙起居注』康熙二十四年三月二十二日壬午条・一三〇七頁～一三〇八頁）。

漢人官僚たちからも、『性理大全』はよく理解できないと言わせたかった康熙帝であるが、どうも孫在豐からは予期した回答が得られなかったようだ。そこで、孫在豐を引き留めて再度確認するのである。

時に順治四年丁亥科三甲八十六名の進士の王熙（崇禎元年〔1628〕～康熙四十二年〔1703〕）は五十七歳、康熙十二年癸丑科一甲二名の進士である王鴻緒（順治二年〔1645〕～雍正元年〔1723〕）は四十歳、康熙九年庚戌科一甲二名の進士の孫在豐（順治元年〔1644〕～康熙二十八年〔1689〕）は四十一歳、康熙帝は三十二歳であった。

五月二十七日にも康熙十五年丙辰科二甲六名の進士の熊賜瓚（崇禎十一年〔1638〕～？）に次のように質問をしている。<sup>(7)</sup>

上（康熙帝） 講官の熊賜瓚に問うて曰く「爾 何れの經を習うや」と。

熊賜瓚 奏して曰く『『尚書』を習う』と。上（康熙帝） 曰く「爾 可（まこと）に常に『性理大全』を見るや否や」と。熊賜瓚 奏して曰く「曾て看過す」と。上（康熙帝） 問うて曰く『『皇極經世書』は其の源流、爾亦た曾て窮究するや否や』と。熊賜瓚 奏して曰く『『皇極經世 [書]』は理數 精微なれば、臣 看過と雖も、未だ能く洞然（はっきり）ならず」と。上（康熙帝） 之に頷く（『康熙起居注』 康熙二十四年五月二十七日丙戌条・一三三〇頁）。

熊賜瓚から、『皇極經世書』は「未だ能く洞然（はっきり）ならず」という返事を得て、うなずいているのである。

こうした確認作業は、二年後にも行なわれている。康熙二十六年六月九日に康熙帝は、六十一歳のいわゆる道学者として有名な湯斌（天啓七年〔1627〕～康熙二十六年〔1687〕：順治九年壬辰科三甲百六十七名の進士・康熙十八年己未博學鴻儒科一等十八名）に經書について質問せよと命じる。これには湯斌が困ったと思われる。この時期、湯斌は宮廷内で批判にさらされており、この二日前には康熙帝自身から叱責されているからである（拙稿「李光地の眼を通して見た湯斌の失脚」（下）・『経済理論』第274号・1996年参照）。

上（康熙帝） 曰く「……朕 深宮に書を讀み、常に書の旨に於いて詳らかに考究を加うれば、爾（湯斌） 試みに經書中の語を擧げて來り問へ」と。[湯] 斌 奏して曰く『『中庸』（第一章・第四節）の「喜怒哀樂之未發」の一節、請う皇上（康熙帝）の聖教を俯して賜わんことを』と。上（康熙帝） 之が爲めに本を探り原（みなもと）を窮め、條分縷晰（じょうぶんるせき、千差万別で

✓（7）この少し前に、康熙帝は常書・孫在豐・明珠と次のような対話をしていることが、熊賜瓚の質問へとつながっているのかもしれない。

上（康熙帝） 曰く「彭定求・蔡升元の二人は係れ狀元なり。聞くに徐倬も頗る才學有り」と。因りて常書・孫在豐を顧みて曰く「此の外に心を理學に留める者有りや否や」と。孫在豐 奏して曰く「前の大學士の熊賜履 理學を講究す。聞くに伊の弟の熊賜瓚も亦た意を此に留む」と。上（康熙帝） 大學士に問いて曰く「熊賜瓚は如何」と。明珠 奏して曰く「聞くに[熊] 賜瓚は能く其の兄の學を得る」と……（『康熙起居注』 康熙二十四年四月初二日辛卯条・一三一二頁～一三一二頁）。

ありつつ条理があること)にして、中和の奥義を闡(あきらか)にし、本道の微言を敷く。講じて「天地の位し、萬物 育す」(第一章・第五節)に至りて、戒懼謹獨を將って、「心正」・「氣順」,「學問の極功」・「聖人の能事」とす①。『中庸』の首章の大旨、闡發宣示し復た餘蘊無し。[湯] 斌 奏して曰く「天地萬物 亦た中和に分屬す可きや否や」と。上(康熙帝) 曰く「先儒 中和に分屬するは良に是なり」②と。[湯] 斌 奏して曰く「聖學の高深 極まれり」と(『康熙起居注』康熙二十六年六月初九日乙卯条・一六四一頁～一六四二頁)。

①『中庸章句』(第一章・第五節)「天地の位し、萬物 育す」にある朱子注の言葉を並べたものである。

②『中庸或問』に「曰く『……中和を分けて以て屬すは、將た又た破砕の甚だしきと爲さざらんや』と。曰く『世 固より未だ能く中を致して和に足らざる者有らず。亦た未だ能く和を致して中に本づかざる者有らざるなり。未だ天地 已に位し、萬物 育せざる者有らず。亦た未だ天地 位せずして、萬物 自ずから育する者有らざるなり。特に其の効に據り、其の然る所以を推し本づくるは、則ち各々従り來る所有りて、紊す可からざるのみ』と」(『中庸或問』第二章)。

湯斌は『中庸』第一章についてたずねる。康熙帝は、『中庸章句』の朱子注と『中庸或問』とに従って回答する。康熙帝に恥をかかせずにすみ、湯斌は胸をなでおろしたと思われる。しかし、湯斌は二ヵ月後の左遷され、十月に亡くなってしまう。

また、康熙帝は、官僚以外にも文章の手直しを命じることもあった。それは、曲阜に巡行した時のことである。康熙帝は、孔子の子孫に講義させようとした。そこで、『桃花扇』の作者として有名な孔尚任(順治五年〔1648〕～康熙五十七年〔1718〕:孔子六十四世の子孫)が、その講義録を作成する。康熙帝は、それを見て訂正を命じている。

是の日(康熙二十三年十一月十七日)、衍聖公孔毓圻に諭して學びて經術有

る者一・二人を選び、講章を撰擬し以て進ましむ。〔孔〕毓圻 士子の僻壤鄙陋に生まれ、以て詔旨に副うるに足らずを以て、勉めて國子生の孔尚任をして二編を草さしむ。常書・朱馬泰<sup>もたら</sup> 齎し行幄に至り、奏して御覽に呈す。上（康熙帝） 覽畢りて、常書等を顧みて曰く「撰する所の講章の文字尚お未だ其の精微を得ず。其の篇末の排語の平仄も亦た少しく<sup>つと</sup> 調わず、音韻<sup>つね</sup> 倫無し。大典は關係 綦重なれば、詳酌を加えざる可からず」と。常書等 奏して曰く「臣等 少き時、粗く經史を讀む。稍や文義を知ると雖も、部署に備員たるに因りて、尋究すること深からず。皇上（康熙帝）の聰明 天授なれば、默識して心通し、韻學に研精す。故に能く一覽して瑕疵を辨別す。臣等 皇上（康熙帝）の指示を経て、昭然として蒙<sup>ひら</sup>を發くが若し」と。上（康熙帝） 曰く「爾等 此の講章を以て大學士の王熙・學士の孫在豐と共に相い更定す可し」と。〔王〕熙等 旨に遵がい更定し訖り、随いて御覽に呈す。上（康熙帝） 善しと稱す（『康熙起居注』康熙二十三年十一月十七日戊寅条・一二五三頁）。

『康熙起居注』では扈從した王熙・孫在豐が文章の訂正を命じられ、訂正したとしている。だが、孔尚任の伝えるところによると、孔尚任自身が訂正したという。

〔康熙二十三年十一月〕十七日戊寅、……翰林院掌院學士の孫公在豐 旨を傳えて云う「撰する所の講義 好しと雖も、但だ數字の未だ妥（おちつか）ず。即ち改易せしむ」と。一一其の應に改むべき處を指示す。隱<sup>かすか</sup>に搯（つまみ出す）せし痕有り。蓋し睿鑒に出るなり。遂に數字を更め擬し御覽に呈し訖る（『出山異數紀』『昭代叢書』乙集・卷十八・三葉～四葉）。

孔尚任は、素直に感動してそれにしたがう。このおかげで、孔尚任は國士館博士に任ぜられることになる。

さらに康熙二十四年一月二十八日に康熙帝は、宮廷で官僚達を試験し、徐乾學（崇禎四年〔1631〕～康熙三十三年〔1694〕：康熙九年庚戌科一甲三名の進士）の文才を認めながらも、彼が提出した七言律詩の平仄の誤りを指摘する（拙稿「徐乾學の人間像」『經濟理論』第301号・2001年・59頁～60頁）。

その一週間後にも、徐乾學の文章を批評する（同拙稿・61頁）。そして、三月にも文章の改定を命じた。

論もて祭りし故の大學士の李霽の祭文を以て呈覽す。上（康熙帝）曰く「此れ誰の作に係る」と。明珠 奏して曰く「徐乾學の作る所なり」と。上（康熙帝）曰く「祭文・碑文は關係 緊要なれば、其の人の行事を相る<sup>み</sup>を須<sup>もち</sup>いて文を爲<sup>つく</sup>れば、方<sup>はじめ</sup>て天下を信服す可し。此の文は佳しと雖も、尚お當に其の行事を按じて稍や更改を加うべし。爾等 酌量して改定す可し……」と（『康熙起居注』康熙二十四年三月二十九日己丑条・一三一二頁）。

これは、当時宮廷で文章家とされた徐乾學に文の改定を命ぜられるほどの学力を有していることを康熙帝は誇示したかったためではないだろうか。ただ、このために江南出身の文人官僚たちの領袖であった徐乾學との関係はうまくゆかない。また、江南出身の文人官僚たちの康熙帝の学力に対する評価も厳しいものになる。

このようにおおよそ康熙二十年代前半までの康熙帝は、自己の学識を示すために官僚たちによく質問している。康熙二十年代後半になると、こうしたことはあまり行なわれなくなる。それは、自分が理想とした学力に、実際の学力が追いついてきたためであろう。また、康熙二十六年末に太皇太后が亡くなってから、ようやく康熙帝に権力が集中しはじめたことにもよるのであろう。背伸びをして学力で官僚たちを押さえ付ける努力をする必要がなくなってきたのである。

## おわりに

以上、見てきたように、康熙帝は三十代前半（康熙二十年代後半）頃から、ほんとうに自己の学力に自信をもちだしたようである。ただし、康熙帝にとっての学問の目的とは、「治道」であった。二十歳の時すでに康熙帝は次のように述べている。

朕の平日の讀書窮理、總て是れ要するに治道を講求するためなり（『康熙起居注』康熙十二年八月二十六日癸亥条・一一六頁）。

また、二十四歳の時にも次のように述べる。

卿等 毎日起早（朝早く）に進講するは、皆な天徳・王道・修齊・治平の理なり。朕（康熙帝） 孜孜として問學するは、義理を講明し、以て治道に資せんと欲するに非ざる無し。朕 不明なりと雖も、虚心に傾聴し、尋繹玩味し、甚だ啓沃の益有り。學を爲すは多言に在らずと雖も、務めて躬行實踐を期す、徒だ口耳の資を爲すに非ず。然れども學問は窮まる無く、義理 必ず須く闡發すべし。卿等 以後の進講は、凡そ見る所有れば、直ちに陳べ隠す無く、以て朕が孜孜として學に嚮うの意に副えよ（『康熙起居注』康熙十六年五月二十九日甲辰条・三一〇頁）。

晩年の康熙五十二年六月にも、次のように言う。

朕の一生の學ぶ所の者は、天下を治むるが爲なり。書生の坐觀（ぼうかん）して論を立つるの易きにあらざるなり（『御製朱子全書序』『朱子全書』巻首・十一葉＊『聖祖仁皇帝御製文集第四集』卷二十一所収「朱子全書序」も同文）。

また、文人官僚たちも、皇帝の学問はそうしたものであると理解していたようである。康熙帝の前の順治帝の時の発言であるが、魏裔介（萬曆四十四年〔1616〕～康熙二十五年〔1686〕：順治三年丙戌科三甲六十二名の進士）は、順治十年（1653）に次のように述べている。

蓋し帝王の學と士子の章を尋ね句を摘する者とは同じからず。要は古今の治亂する所以・人才の得失する所以・政事の修廢する所以の故を詳求し、斟酌損益して之を行ない、以て大中至正に協うに在り（『兼濟堂文集』巻一・順治十年正月十四日「敬抒管見疏」）。

皇帝の学問とは、文化人となるためにするものではなく、治世に役立つためにするものであるという。

したがって、当時の文人官僚たちも康熙帝の学力に対しては、相手が皇帝ということもあるが、自分たちと同じ立場から見るということは考えなかったのではないだろうか。